



Title	現代中国語の三音節名詞の構造と意味
Author(s)	袁, 曉今
Citation	大阪大学, 2015, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52088
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏名 (袁 曉 今)

論文題名

現代中国語の三音節名詞の構造と意味

論文内容の要旨

中国語は対をよしとし、偶を尊ぶ。その結果、形態論研究も必然的に二音節を対象とするのが主流であった。しかし、近年、新語における三音節名詞が占める割合が多くなっており、中国語の語彙体系において大きな変動が生じつつあることが観察された。本論文は従来の中国語形態論に残されていた「三音節名詞」研究の空白を埋めるため、専用のコーパスを構築し、「構造」と「意味」の計量分析を行い、「語構造」と「語形成」の両面から三音節名詞の全体像を考察した。その上で、今後の中国語の語彙体系の行方を予見するための参考資料を提供することを目的とした。

まず、序論において、研究の背景、目的、意義、対象、方法を述べ、関連する先行研究の示唆と問題点を指摘しながら紹介した。

「第一章 常用語における三音節名詞の構造」では、現代汉语常用词表 から抽出した4,820語の三音節名詞について、主に「1+2」型（紅/宝石）と「2+1」型（博士/生）の修飾型を研究対象として計量分析を施した。

三音節名詞の主要類型は8割強を占める「2+1」型である。その中でも、「N+N」（博士/生）と「V+N」（挡箭/牌）タイプが最も多い。そして、三音節名詞を生産しやすい二音節語基の主要類型は「nn修飾（地板（砖）」、「vn述目（挡箭（牌）」、「vv並列（呼吸（道）」などであることを明らかにした。

造語力の高い単音節語基（21の能産前語基、17の類接頭辞、66の能産後語基、51の類接尾辞）をリストアップし、今後の中国語教育にとって有用なデータを提供した。

「柔軟性」を持つ二音節語基と「粘着性」を持つ単音節語基が三音節名詞の生成を促進していると指摘した。

三音節名詞内部の語基どうしの結合パターンについて、三角形を基本形とする9パターンに分類し、その内、5パターンは三音節名詞の独自の語構造であると指摘し、それぞれの特殊な語構成操作を明示した。図示による直観的な理解が可能となり、中国語学習者を助けることが期待できると述べた。

野村雅昭(1974)と朱京偉(2011)の日本語の三字漢語名詞の統計データと、三音節名詞の間で日中対照研究を行った。その結果、全体像においては大差がないが、「養父母、教職員」のような「併称語」は中国語ほど活発ではないなど細かい差異を指摘した。

「第二章 常用語における三音節名詞の意味」では、従来の構造言語学的方法では十分な分析が行き届かなかった三音節名詞内部の意味構造に対し、生成語彙論から「クオリア構造」という考え方を導入し、修飾部が中心部のクオリア構造の形式役割、構成役割、目的役割、主体役割の何れかを特定化するという前提に立ち、更に、本論文における4つの役割に関する具体的な規定を加えた上で、計量分析を施し、以下の結論を得た。

修飾部が中心部のクオリアの「形式役割」と「目的役割」を特定化するケースが多い。その内、「2+1」型の「N+N」タイプの形式役割（博士/生）、「V+N」タイプの目的役割（挡箭/牌）、「V+N」タイプの形式役割（败家/子）が三音節名詞の主要な意味構造である。

“白斩鸡、红铃虫”のような三音節名詞独自の意味構造を持った語（つまり、修飾部の2文字がそれぞれ個別に中心部の役割を特定化する語）が存在することが分かった。

生産性の高い単音節語基“-人、-机、-器、-性、-员、-病”などがどのような二音節語基を要求するのかについて、その意味役割の傾向性を炙り出した。

6ケースの「名名複合三音節名詞」（「N1+N2」）の意味合成のプロセスを解明し、N1とN2のそれぞれのクオリア構造が「N1+N2」の意味合成における役割分担を明らかにした。

構造助詞“的”を含む句構造“XY的Z”と語彙化した三音節名詞“XYZ”を取り上げ、例えば、“城里的人（都会にいる人）”と“城里人（都会人）”、“领路的人（道を案内する人）”と“领路人（指導者）”の差異について、それらがクオリア構造の「主体役割」と「目的役割」の対立、即ち、「そこにあるのかないのか：事実存在性」と「何であるのか：本質存在性」の対立であると指摘し、中国語文法研究の古くからの大きな難問である構造助詞“的”の

分析に対して新たな視野を提供した。さらに、句構造から三音節名詞への語彙化条件を修飾部の品詞別に導いた。

「第三章 新語における三音節名詞の構造と意味」では、中国語生活状況報告 に収録されている2006年より2012年までに生まれた新語のうち、三音節語の割合がここ数年に亘って半数近くにまで達しており、二音節語を量的に凌駕しているという統計結果を示した。本論文はそのうちの三音節名詞1,170語を抽出し、常用語の三音節名詞との比較を中心に考察した。

vn述目などの動詞性語基が名詞性語基よりも積極的に振る舞うことを指摘し、名詞性語基どうしの複合が複合名詞のプロトタイプであるとする定説を覆すことになった。

vn述目、nv修飾などの組合語基の増長、造語力の高い単音節語基の固定化、さらに強まった類接尾辞化などを指摘した。

意味構造に関しては、新語では修飾部が中心部の「形式役割」と「構成役割」を特定化することが多いため、新語は「分類重視」であると同時に「内容伝達」をも重視しているということを示した。

「第四章 命名実験から見る現代人の三音節名詞に対する意識」では、言語使用者（母語話者）と言語学習者（日本人中国語学習者）の言語構造に対する意識や感覚を知るために、被験者にある物体や概念についての情報を与えて、それに名前を付けるという「命名」実験を行い、その過程と実験結果および結果分析を詳述した。具体的には、職業、動物、家具など25の意味分類を選出して、文字情報と写真情報による25問の問題用紙を作成し、40名の中国語母語話者と15名の日本人中国語学習者に命名を求めた。この結果、1,375語の名詞と373語の三音節名詞が得られた。実験結果に基づき、

中国語母語話者のみならず中国語学習者もほぼ同じ頻度で三音節語を造語しており、その比率は全体の45.6%に達し、新語における比率44.4%に近接していることが明らかになった。

vn述目、vv述目、va述目を包括するVO述目などの動詞性語基、組合語基の更なる増加傾向が見られた。

被験者が造語する際に、無意識に語構造と意味構造の主要規則の影響を受けていることが分かった。

事物の意味分類が単音節語基、二音節語基に対して選択制限をかける傾向を提示し、名詞の意味論を体系化するのに大きな手掛かりになると考えられる。

これらの実験結果により、本論文は「意味情報の充実性」と「言語の経済性」との交点に三音節語が位置すると指摘し、中国語の名詞の語彙体系において三音節名詞の増加によってもたらされる大きな変動が生じつつあるという新見解を示した。

最後に**結語**として、本論文の研究結果と研究価値をまとめ、将来の中国語の名詞の語彙体系では三音節語が主流となり、三音節名詞の語形成においては、単音節語基が固定化し、動詞性成分が二音節語基に充当されるケースが増え続けると予想した。また、従来軽視されてきた語構成論を教育現場に取り入れ、本論でまとめた造語力の高い語基リストや語基の結合パターン図、クオリア構造の考え方などを活用すべきであると提唱した上で、「置換法」という具体的な方策を示すなど、中国語教育の現場へ幾つかの提言を行った。そして最後に、今後に残された6つの課題と期待される6つの研究テーマを掲げ、今後の展望を述べた。

本論文は本文の後ろに、常用語4,820語、新語1,170語、命名語373語の三音節名詞のコーパスを**付録**として添付した。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (袁 曉 今)			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	教授	古川裕
	副 査	教授	杉村博文
	副 査	教授	由本陽子
	副 査	特任准教授	金昌吉
	副 査	特任准教授	張恒悦

論文審査の結果の要旨

『現代中国語の三音節名詞の構造と意味』と題された本論文は、従来の中国語研究界ではあまり研究されることのなかった「三音節名詞」に考察的を絞り、その「構造」と「意味」について分析を行い、現代中国語の三音節名詞が有する様々な特徴を語構造と語形成の両面から明らかにしようと志した、たいへん優れた論文である。

そもそも中国語には「対をよとし、偶を尊ぶ」指向性が強くあり、その結果として二音節あるいは四音節の語もしくは句が語彙体系の中心を占めることとなり、形態論研究も必然的にこれら二音節あるいは四音節の語句を対象とするのが主流であった。然るに、本論文の第三章でも詳述されるように、近年出現している新語には三音節名詞が占める割合が多くなっており、中国語の語形成および語彙体系において大きな変動が生じつつあることが観察され、従来の研究手法では説明のできない言語事実も数多くみられるようになってきている。本論文はこれらの新しい問題を含め、三音節名詞の語構造および語形成の理論的研究という、従来の中国語形態論に残されていた大きな研究上の空白を埋めるものとして高く評価できる。

以下、本論文の構成に沿って概要と評価を記す。

本論文は、まず序論において研究の背景、目的、意義、対象、方法を述べ、この分野における主な先行研究を紹介し、それら従来の研究方法では三音節名詞の本質が明らかにできないことを述べている。

その問題提起を承けて第一章では、常用語における三音節名詞の構造を詳述している。内部構造を分析する対象として『現代漢語常用詞表』（国家語言文字工作委员会編，2008年，商務印書館，北京）から抽出した4,820語の三音節名詞をデータとしており、これら大量のデータに対して、きめの細かい分析と記述を行っている。中でも、造語力という角度から単音節語基と二音節語基を計量的に分析し、生産性の高い語基をリストアップしている点は、今後の中国語教育にとって有用なデータを提供したものと評価できる。また、三音節名詞内部の語基どうしの結合パターンについて三角形を基本形とする9種類のパターン図に描いて内部構造の説明を試みていることも、図示による直観的な理解が中国語学習者を助けるであろうことが期待される。ただ、日本語の三音節名詞（三字漢語）との対照では、野村(1974)と朱京偉(2011)の統計結果を引用するにとどまり、新しい調査が行われていないため、新たな知見が提出されるに至っていない点には遺憾が残る。

続く第二章では、常用語における三音節名詞の意味がトピックとなっている。ここで意味分析を行うための理論的方法論として生成語彙論からクオリア構造という考え方を導入している点は、本論文が提示した新たな挑戦であると言える。本章では影山(1999,2011)、小野(2005)、袁毓林(2013,2014)などの先行研究に多くを学び、従来の構造言語学的方法では十分な分析が行き届かなかった三音節名詞内部の意味構造に対して、クオリア構造の形式役割、構成役割、目的役割、主体役割という枠組みを採用することで合理的な解釈が可能になることを主張しており、一定の説得力を得ることに成功している。たとえば、第一章の計量分析で明らかになった生産性の高い単音節語基「-人、-機、-器、-性、-員、-病、-車、-力、-站、-品」等々がどのような二音節語基を要求するのかについて意味役割の傾向性を炙り出せるとしている。また、中国語学の角度から注目されるのは、本章第四節で三音節名詞の語彙化を論じている部分がある。構造助詞“的”を含むフレーズ“XYのZ”と単語化した三音節名詞“XYZ”を取り上げ、たとえば“城里の人”（都会にいる人）と“城里人”（都会人）の差異について、クオリア構造による分析を応用して、前者のフレーズ（“的”字構造）は「そこにあるのかないのか：事実存在性」を帯び、後者の語（すなわち三音節名

詞)は「何であるのか：本質存在性」を帯びるというように、意味特徴の違いに導かれることを指摘しているのは、中国語文法研究の古くて大きな難問である構造助詞“的”の分析に対して新たな視野を提供するものである。ただし、本章で述べている生成語彙論およびクオリア構造に関しては、最終試験の口頭試問において審査員からも指摘されたように、いくつかの概念についてその定義が明確でないこと、用語の使いかたに揺れが見られること、当該分野の研究に見られる近年の新たな進展や研究成果に関する理解が求められるなどの問題があり、これらは今後の研究において修正が望まれる点である。

第三章では、辞書に既に登録されているような既存の常用語を対象として行った前二章の構造分析および意味分析を基礎にして、『中国語生活状況報告』(教育部語言文字信息管理司編,2007~2013,商務印書館,北京)から2006年より2012年までに生まれた新語のうち三音節名詞1,170語を抽出し、これら多量の新語データを対象として、新しく生まれた三音節名詞の構造と意味を分析している。ここでは、まず新語のなかで三音節語の占める割合がここ数年に亘っておよそ半数に達しており、二音節語や四音節語を量的に凌駕しているという統計結果が示され、この結果は大方の予想を覆すものである。また、語形成の面では動詞性の語基が名詞性語基よりも積極的に振る舞うという指摘があり、これも名詞性語基が複合名詞のプロトタイプであるとする定説を覆すものとなっている。また、新語では修飾部が被修飾部の形式役割と構成役割を特定化することが多いため、新語は分類重視であると同時に内容伝達をも重視しているということを明らかにしている。

第四章は「命名実験から見る現代人の三音節名詞に対する意識」と題し、言語使用者(母語話者)と言語学習者(日本人中国語学習者)の言語構造に対する意識や感覚を知るために、被験者にある物体や概念を与えて新しい語を作らせるというたいへんユニークな「命名」実験を行った過程とその実験結果および結果分析を詳述している。その実験プロセスと命名実験の結果分析はたいへん興味深いもので、中国語母語話者のみならず中国語学習者もほぼ同じ頻度で三音節語を造語しており、その比率は全体の45.6%に達し、新語における比率44.4%に近接していること、また名詞性語基よりも動詞性の語基が多く見られることなどを明らかにしている。これらの実験結果により、本論文の著者は、一つ一つの語が内包する意味情報の充実を求めるベクトルと、その一方で言語の経済性を求めるベクトルが互いに交差する点に三音節語が位置すると指摘しており、中国語の語彙体系において三音節名詞の増加によってもたらされる大きな変動が生じつつあるという新見解を示している。この見解の妥当性は中国語語彙の今後の更なる継続的通時観察を待つ必要があるが、本論文で扱ったデータに基づく限りではおおむね首肯できる主張である。

本論文は最後に結語として、上述の四つの章で行った研究をまとめ、研究成果とその価値、中国語教育の現場へ幾つかの提言を行うとともに、今後に残された課題と今後の研究に期待される展望を述べている。さらに、本論文には添付資料として、第一章と第二章で扱った常用語4,820語、第三章で扱った新語1,170語、第四章の命名実験によって得られた373語の三音節名詞がコーパスとして添付されており、分析結果の再検証にも耐えられる一覧性のある貴重なデータを提供している。

上記のように、本論文はこの表題が示す通り、現代中国語の「三音節名詞」について、その「構造」と「意味」について、先行研究の成果に対してそれぞれの長所と短所を見極めたうえで、三音節の常用語名詞および新語名詞合わせて約6000語のコーパスを対象として計量的分析を行い、これらの三音節名詞の構造について信頼できる客観的データを算出したうえで、クオリア構造という新たな手法を用いて慎重かつ論理的に意味分析を行っている。さらに贅言すれば、著者は中国語母語話者でありながら、非常にこなれた日本語によってこれだけ大部の論文を丁寧に記述しあげたことは特筆に値するものである。

上に記した諸点や、最終試験において審査委員から指摘された問題点など、より深い分析と更なる検証を必要とする部分や、修正や訂正を必要とする箇所も残ってはいるが、本論文が中国語の形態論研究において長年手つかずで残されてきた三音節名詞という大きな空白地帯を埋めることに何よりも大きな学術的価値が認められる。

これらのことを総合的に判断し、本審査委員会は全員一致で、本論文が博士(言語文化学)の学位を与えるにふさわしい論文であると判断した。